

【連載】

日中学術交流の現場から 第 3 回

ゴジラ・天皇制・市民科学

—「令和ブーム」に抗して—

山口 直樹 (北京日本人学術交流会責任者)

はじめに

2019年5月1日から元号が変わり、「平成」から「令和」となったという。

その前後において日本の大手マスメディアの新聞やテレビは、「新しい時代のはじまり」という報道一色で染まっていた。それと連動する形で「令和フィーバー」なるものが起こり、菅官房長官が、辛抱強く人の話を聞く「令とおじさん」として賞賛されていた。

かつて首相をやったことのある石橋湛山が、元号を廃止することを提起していたことを報じているメディアは、私が見る限り皆無だった。石橋湛山が、所属していたことのある東洋経済新報ですらまったくそうしたことは触れていなかった。

北京で国際関係論を専門とする北京大学教授に私の主催する北京日本人学術交流会で報告してもらい討論していた時のことだ。その北京大学教授は、「日本は、天皇制があったからこそ国民がひとつにまとまり、安定した成長と発展を遂げることができたのだ。」と語ったのだ。私は、非常に意外な感じがした。「中国人でも日本の天皇制をそのようにみている人がいるのか」という意外な気がしたのである。たしかにかつて孫文は、中国人一人一人は、砂のような存在であり、ひとつにまとまるのが非常に難しく、すぐにこぼれ落ちてしまうと論じたことがある。そうした中国社会に生きるものからすれば、日本の天皇制が、国民を一つにまとめ安定成長の要因として映るのかもしれない。

しかし、この天皇制こそ、近現代の中国に大きな災いをもたらした根源に存在しているものであることもたしかなことなのである。一世一元制という天皇の代によって元号が変わるこの仕組みは、明治以降に始まっているものだが、もともとは、中国の制度を模倣して始まったものである。中国では、1911年に辛亥革命がおこり、一世一元制は、廃止された。

だが、日本ではこの一世一元制が、現在まで生き残っている。市民科学者にとってこの一世一元制という制度は、かならずしも自明のものではない。ここでは戦後日本最大のモンスター、ゴジラと天皇制の関係について考えてみることにしたい。



ゴジラ 60周年記念 デジタルリマスター版 紹介ページ 映画-Movie Walker より
<https://movie.walkerplus.com/mv55765/>

1. ゴジラと破壊

ゴジラは、2002年突如としてわれわれの前に姿をあらわした愛らしいあごひげあざらしてある「タマちゃん」のようにわれわれを癒すようなかわいい存在として登場してきたのではなかった。そうではなく、戦後日本の復興と高度経済成長のはじまりである1954年当時を生きる人々を恐怖させる不気味な存在としてゴジラは姿をあらわしたのである。そして、なによりもゴジラは破壊する怪獣であった。ゴジラは破壊し、破壊し、防衛隊の攻撃を受けてもなおも破壊する怪獣である。

ゴジラは、橋を破壊し、道路を破壊し、工場を破壊し、漁船を破壊し、ダムを破壊し、港を破壊し、城を破壊し、民家を破壊し、有刺鉄線を破壊し、鉄道を破壊し、航空機を破壊し、都市のビルを破壊し、警察のパトカーを破壊し、防衛隊の戦車を破壊し、国会議事堂を破壊し、銀座の服部時計塔を破壊し、原子力発電所を破壊し、原子力潜水艦を破壊し、対ゴジラ用戦闘兵器メカゴジラを破壊し、ニューヨークの国連ビルを破壊し、人々の安心感を破壊し、宇宙人X星人の地球侵略計画を破壊し、ゴジラに敵対する怪獣を破壊し、既成のモンスター映画という概念を破壊し、これ以上ない破壊の限りをつくした。

ゴジラは、このかつてない破壊によって日本のみならず世界の大衆文化史上に残る存在になったといつてよいだろう。しかもゴジラの破壊したものは、戦後日本の在り方を示すようなものばかりであった。

ゴジラの最大の特徴とは、破壊することである。破壊しないゴジラはゴジラではない。ゴジラは、破壊することを仕事をしているといっても過言ではない。だが、その徹底した破壊を行ったゴジラですら破壊しなかった場所がある。

それは、「不滅」の象徴が住む皇居にほかならない。(私の知る限り皇居に最も近づいた怪獣は、『ウルトラQ』(1966年)第四話に登場するマンモスフラワーである。マンモスフラワーは、皇居のお堀に根を張っていた。)

2.ゴジラと戦争と天皇

ゴジラは、なぜ東京にやってくるのだろうか。

これまでのゴジラ論において語られている有力な説にゴジラは、南の海で亡くなった日本兵士の怨念の集合体が、皇居に引き寄せられるから東京にやってくるのだという説がある。

川本三郎は、『今、ひとたびの戦後日本映画』(中公文庫,2000)の「ゴジラはなぜ「暗い」のか」において以下のように述べた。『ゴジラ』(1954)のラストシーンでゴジラが、ゴジラと同じ闇を背負った化学者、芹沢博士によるオキシジェンデストロイヤーの攻撃を受け、海に消えていくときについてである。

ゴジラは「戦災映画」、「戦禍映画」である以上に、第二次世界大戦で死んでいった死者、とりわけ海で死んでいった兵士たちへの鎮魂歌ではないのかと思いたる。“海に消えていった”ゴジラは、戦没兵士たちの象徴ではないのか。(85頁)

これが、現代のゴジラ解釈においてスタンダードなものとなっているようにおもわれる。ゴジラが日本人にとっての「戦争の記憶」であることが、確かな以上、こうした見方が出てくるのは、理解できることであろう。(元号廃止を主張した石橋湛山の息子もまた、南方で死んだ日本兵士であった。)

続けて川本はゴジラと天皇について指摘する。

ゴジラが銀座を破壊し、国会議事堂を破壊し、紀尾井町のNHKのテレビをへし折り、その次に目標にしていた皇居を前にしてなぜか突然、くるっとまわれ右して海に帰っていくシーンは「ゴジラ」のなかのもっとも痛ましいシーンである。ゴジラが皇居を回避する。

皇居だけは破壊できない。これを「ゴジラ」の思想的不徹底と批判するものは、天皇制の「暗い」呪縛力を知らぬものでしかないだろう。(86頁)

実際に『ゴジラ』(1954)の映像を見てみると、この文章が言うほどに明確に「ターン」しているとは思えない。しかし、東京の面積のかなりの部分を占める皇居にゴジラが、踏み込んでいないのは、

たしかに不自然に思えないわけではない。

民俗学者の赤坂憲雄は、「ゴジラはなぜ皇居を踏めないのか」で川本三郎の説を受けて、このように述べた。

『ゴジラ』の基層にはおそらく無意識の構図として、戦争の末期に南の海に散っていった若き兵士たちの、行く場もなく彷徨する数も知れぬ靈魂の群れとかつて彼らを南の戦場に送り出し、いま死者の魂鎮めの靈力を失ったただの人間にかえったこの国の最高祭祀者とが声もなく、遠く対峙しあう光景が沈められているはずだ。(23頁)

『ゴジラ』(1954)という映画を鎮魂の儀式である点、ゴジラを第二次世界大戦における死んだ日本兵の象徴として読む点などは一致している。しかし、異なっているのは、ゴジラがなぜ皇居を攻撃しなかったのかという理由である。川本が、「天皇制の暗い呪縛力」を見たのに対し、赤坂は、それに反論する。

ゴジラが皇居の周囲をめぐるすえに背を向け、南の海に還っていくのは、そこにはもはや死者たちの鎮め癒してくれるものがないことを悟ったからではないのか (23頁)

日本の兵士を送り出した「神」としての昭和天皇が、戦後においては人間宣言をし、「人間」となったためゴジラは、会うべき相手を失ったことを悟ったというのである。

こうしたとらえ方は、様々な解釈の余地を残しているが、ここで私たちは、『モスラ』(1960)の原作者の一人でもあった堀田善衛の言葉に耳を傾けてみる必要がある。

堀田善衛は、中国、上海で敗戦を迎えることになるが、その直前に1945年3月18日、東京深川富岡町の焼け野原で昭和天皇を目撃していた。堀田はこの時のことを『方丈記私記』(ちくま文庫、1988)のなかで以下のように書いている。

私が、歩きながらあるいは電車を乗り継いで、うなだれて考え続けていたことは、天皇自体についてではなかった。そうではなくて廢墟でこの奇怪な儀式のようなものが開始されたときにあたりで焼け跡をほっくりかえしていた。まばらな人影がごそごそというふうに集まってきて、それが集まってみると実はかなり人数になり、それぞれがもっていた鳶口や円びを前においてしめった灰のなかに土下座をした。その人たちの口からでた言葉についてであった。早春の風が。何一つ遮るものがない焼け跡を吹き抜けていき恐ろしく寒くて身が凍える思いをした。心の中も恐ろしく寒かったのである。風は鉄の匂いとも灰ともなんともつかぬ臭気を運んでいた。私は、方々に穴のあいたコンクリート塀の蔭にしゃがんでいたのだが、これらの人々は本当に土下座をして、涙を流しながら、陛下、私たちの

努力が、足りませんでしたので、むざむざ焼いてしまいました、まことに申し訳ない次第でございます。生命をささげまして、といったことをロクに小声でつぶやいていたのだ。

三、羽なければ空も飛ぶべからず 『方丈記私記』

1945年3月10日にアメリカ軍による東京大空襲があり、一晩で10万人以上が殺された。

(1954年の『ゴジラ』におけるゴジラの東京の破壊は、明らかにこの東京大空襲をイメージしている。実際、当時の人々が『ゴジラ』(1954)を見たならば、東京大空襲のことを想起しただろう。)

見渡す限りの焦土のなかをなぜか勲章を付けた軍服姿の昭和天皇を堀田善衛は目撃して驚いている。

私は驚いてしまった。私は、ピカピカ光る小豆色の自動車とピカピカ光る長靴とをちらちら眺めながら、こういったことになってしまった責任を一体どうしてとるつもりなのだろう、と考えていた。ところが責任は、原因を作った側つくった方ではなくて、結果を、つまり焼かれてしまい、身内の多くを殺されてしまった方にあることになる!そんな法外なことがどこにある!こういう奇怪な逆転がどのようにして起こりうるのか! (同書)

こうなってしまった責任をはたしてどうやってとるのかというのは、堀田自身が、目の前の昭和天皇に対して思ったことだった。しかし集まってきた人々は、昭和天皇の責任を問うどころか、土下座して涙を流し、誠に申し訳ありませんと昭和天皇にわびたという。

戦争を人災ではなく天災のようにとらえ、「強いられた死」に対しての「最高の責任者」である昭和天皇に被害者が謝るという驚くべき転倒した理不尽な構造。この構造の中で一億総懺悔—懺悔は大きな損害を与えたアジアの人々に対して行われたのではない—が、行われ、昭和天皇の戦争責任や植民地支配責任は、雲消霧散してしまった。1945年においてはこのことこそが最も問題にされなければならなかったはずである。

だが、現実にはそうはならなかった。戦争責任を無化したしたところに自前の民主主義や自立した市民が育つだろうか。堀田が焼け野原で天皇を見たとき、広島、長崎への原爆投下までポツダム宣言受諾まで、まだしばらく間があった。広島に原爆が投下された後、1947年、昭和天皇が、廃墟になった広島に行幸したとき、人々は熱狂的に昭和天皇を歓迎した。だが、この28年後の1975年、「原爆投下の事実を陛下はどのように受け止められたでしょうか。お伺いしたいと思います。」という記者の問いに対して昭和天皇は、「原爆が投下されたことに対して遺憾には思っていますが、こういう戦争中であることですから、どうも広島市民には気の毒であるが、やむを得ないことと私は思っています。」と答えた。これは、非人道的な発言であり、広島市民は裏切られたのだが、これに対して大きな抗議が沸き起こったというようなことは起こっていない。

(一方、昭和天皇の広島行幸から4年後の1951年、昭和天皇は、京都大学に行幸した。このとき

京都大学の学生は、天皇を歓迎せず、抵抗の姿勢を示した。ここには朝鮮戦争で警察予備隊が創設され、占領軍のもとで「逆コース」が進んでいくことへの京大生たちの危機感を感じ取ることができる。このとき京大同学会が出した昭和天皇への公開質問状は、「私たちは一個の人間として貴方を見るとき同情に堪えません。」という一文で始まるものであった。この公開質問状の執筆者が、技術論や技術史の研究で知られる中岡哲郎氏であったことは、とりわけ、市民科学に関心をよせる人々には、記憶されてよいことである。)

戦後民主主義の根本問題が、ここにある。ジョン・ダワーがいうように戦後民主主義とは、天皇制民主主義である。

『方丈記私記』の無常観の文脈でいえば、ここでは「無常観の政治化」といったことがおこなわれていたのだ。たとえば、宮崎駿は、堀田善衛の影響を大きく受けているが、ゴジラ映画や宮崎アニメに共通するのは、この無常観への抵抗という点である。

3. 自然と時間の怪獣としてのゴジラ

戦争は、天災ではなく、人災であった。「東亜永遠の平和のために」や「八紘一宇」というスローガンが、日本が、中国に戦争を仕掛ける時のスローガンであった。

ゴジラもまた天災で生まれた怪獣ではなかった。当時の人類の最先端の原子核物理学を基礎とした科学技術による水爆実験で生み出された太古の恐竜スタイルをした怪獣であった。ゴジラとは、最先端の科学技術によって自然支配が、完了したと思われた瞬間に自然が反乱を起こすことにかかわる存在である。

だが、なぜ人類の最先端の科学技術による水爆実験で生み出された怪獣が、太古の恐竜スタイルをとるのか。この問いは、ゴジラを考える上で本質的な問いであろう。高度経済成長が始まろうとしていたこの当時、忌まわしい戦争の記憶を忘却し、復興による輝かしい未来を志向する時間意識が、人々をとらえつつあった。投げ捨てるべき忌まわしい過去と復興と高度経済成長による輝かしい未来というように時間に価値の序列が生じていた。それは、近代化の時間、進歩の時間意識であった。この当時の人々の進歩の時間意識こそが、もっとも忌まわしく、投げ捨てたい過去としてゴジラに太古の恐竜というスタイルをとらせたのであった。この意味でゴジラは自然と時間の怪獣なのである。

天皇制は、今年、西暦2020年で皇紀2680年となるという。『ゴジラ』(1954)に登場する古生物学者の山根博士によれば、ゴジラは、中生代のジュラ紀から白亜紀にかけての恐竜だとされる。ゴジラは、もっとも新しく見積もっても6600万年前という天皇制と比べてもはるかに太古の生物なのである。

したがって、ゴジラ目から見るなら天皇制は、「新しい歴史と伝統」に属するものである。そして1954年は、かつての「天皇の軍隊」が、自衛隊として戦後日本社会に登場してくる年でもあった。守るべきものを持ちつつあったこの当時の人々は、この自衛隊を「戦力なき軍隊」と揶揄する精神をもった人々でもあった。そして天皇制や自衛隊の政治利用を企図する現在の総理大臣、安倍晋三が生まれたのもこの年であった。

4. 科学技術という神

敗戦直後の日本では、アメリカによるヒロシマ、ナガサキへの原爆投下をアメリカのデモクラシーと科学の日本のファシズムに対する勝利として論じられたことがある。ここには、戦後啓蒙期の科学への異様なまでの信仰を見て取ることができる。この時期の科学技術は、絶対善の位置にあり、まさに神の位置にあったといつてよい。

戦時期の総力戦とは科学戦でもあった。総力戦体制のなかで科学技術は、中核的な位置を占めており科学者や技術者は、特権的な優遇された地位を与えられていた。またこの時期1940年10月8日、昭和天皇は、近代科学に大きな関心を示し、東京帝国大学の総合試験所(三菱財閥によって1939年工学部に竣工)、理、工、農の各学部、地震研究所、航空研究所、天文台などを行幸し、見学していた(『科学ペン』(1940年12月)より)。昭和天皇は、6時間の東京帝国大学滞在中、法学部、経済学部、文学部には目もくれない。

一方、敗戦後、戦後日本では、科学は、民主化と平和の象徴となり、科学者や技術者だけは、戦時中、大きな特権を得ていたにもかかわらず、責任を問われず、ほぼ無傷で生き残ることができた。

『ゴジラ』(1954)という作品が特筆されるべきなのは、この科学技術を神とする科学性善説の戦後啓蒙期にあって最終兵器の使用をめぐる芹沢大助という科学者を登場させ、科学性善説とは異なる科学観を提示しているからである。

科学性善説を本格的に問い直す運動は、山本義隆がいうように1968年の東大の全共闘運動から始まるといつてよいであろうが、大衆向けの特撮映画の世界では、それよりほぼ15年前の『ゴジラ』(1954)においてすでになされていたのである。そしてその『ゴジラ』(1954)が、初めて公開されたのは、1954年11月3日、すなわち明治天皇の誕生日であった。(日本で初めて文化勲章という制度が、はじまるのは日中戦争の始まった1937年のことであった。最初の授賞式は、この年の明治天皇の誕生日、1937年11月3日であった。この日、昭和天皇が、文化勲章を受賞者に授与するのである。このニッポンという国の文化はなんらかのかたちで天皇制と結びついている。日本における祝日や祭日もほとんどが天皇制と関係している。安倍政権は、この「文化の日」を「明治の日」にすることに躍起になっている。このことを常に意識していないと日本における市民科学は臣民科学

となる危機にさらされるであろう。)

5. ゴジラと不幸としての「不滅」

たゴジラがこれまで闘って敗れた怪獣はモスラだけである。

正確に言えば、モスラの幼虫に尻尾をかまれてひきわけにもちこまれたというべきだろうが、ゴジラはなぜか「乙女たちの平和への祈り」を聞いて考えを変える化学者、芹沢博士や「平和怪獣」モスラなど平和に関係するものには弱い。普通に考えて恐竜が芋虫に負けるとはなかなか信じられない。しかし、ゴジラは、モスラの幼虫の吐き出す糸によって動きを止められ、海に落とされるのである。

これはゴジラの戦後民主主義的な理念をあらわすところだとおもわれるが、それは一部でありすべてではない。結局、ゴジラは、モスラとはひきわけが、死にいたることはなかった。ゴジラを倒し、滅ぼせないのは、怪獣だけではない。ゴジラを分析し、人類の英知である科学技術の粋を結集してつくったメカゴジラもそして自衛隊や国連軍もゴジラを依然として倒すことはできないのである。この意味でゴジラは、「不滅」の怪獣である。

だが、このゴジラの「不滅」は、理由のない不滅ではない。高橋敏夫は、『ゴジラが来る夜に』（1993）において「理由なき不滅すなわち存在するというただそれだけのことによって自らを不滅の高みにひっぱりあげている「不滅」の存在をわれわれは残念ながら現代史においても依然として所有し続けている。いうまでもなくあの「不滅」の象徴である。この「不滅」の感覚が、われわれの社会を理由もなく浸透しているからであろう。あのおそるべき空疎な、それでいて権威的な言葉「……は永遠に不滅です。」などという言葉が不意に顔を出してしまうのである。だがゴジラの「不滅」はそのような意味の不滅ではない。ゴジラはいわば歴史としての「不滅」である。存在の理由が消えれば、死滅するはずの存在なのである。」と述べている。これは、ゴジラについて書かれた文章のなかでも最も優れた文章のひとつである。

「不滅」の象徴がみている試合でサヨナラホームランを打った「燃える男」ミスタープロ野球の引退の言葉は、「巨人軍は永久に不滅です。」であった。だがこのプロ野球12球団唯一の「軍」の不滅とゴジラの「不滅」とは同じではない。そして「巨人軍は永久に不滅です。」といった「燃える男」の弟子にあたるプロ野球選手のニックネームが、ゴジラなのは、一種の皮肉である。

田城明が『核超大国を歩くーアメリカ、ロシア、旧ソ連』（岩波書店2003）であきらかにしているように熾烈な核軍拡競争のなかでアメリカとロシアだけでも1700回以上の核実験を重ねている。それに加え今日ではチェルノブイリに代表されるような原子力発電所の事故、劣化ウラン弾の使用など、福島における原発事故、急速に増設される現代中国の原発など21世紀初頭においてもゴジラは、ますます「不滅」でしかなくその存在を確固としたものになっているのである。

だから、ゴジラの「不滅」は「不幸としての不滅」といいかえることができる。このゴジラの不幸が消滅するときゴジラの「不滅」もまた消滅するだろう。そのことをゴジラもわれわれも望んでいる。しかし、それがいつのことになるかは、だれにもわからない。このことが、ゴジラとわれわれにとってなんともつらいところであるのだ。

6. 破壊的性格としてのゴジラ

ゴジラの徹底した破壊は、1931年にワルター・ベンヤミンが、発表したエッセイ「破壊的性格」(『暴力批判論』(晶文社,1988)所収)にそくして読まれるべきであろう。

ベンヤミンによれば、「破壊的性格がかかげるのは、「場所をあける!」というスローガンだけであり、その行動も取り除き作業にほかにはない。さわやかな空気と自由の空間への渴望はいかなる憎悪よりも強い。」という。さらにベンヤミンは、「破壊的性格はいかなるビジョンもいだかない。欲望もあまりない。破壊したあとになにがあらわれるかなど破壊的性格にとってはつまらないことかもしれない。かつて<もの>が存在していた場所、犠牲者が生きていた場所に、さしあたりすくなくとも一瞬間、何もない空虚な空間ができる。この空間を、占有することなく、使いこなせる人間が、いずれはあらわれるだろう。」と書いている。つまり、破壊的性格にとっての破壊とは、既成のもの解体作業であり、「場所を開ける作業」であって「空間を占有せずに使いこなせる」未来の人々のために「さわやかな空気と自由な空間」をもたらす晴れやかな行為である。そこに打ち開かれる自由な空間は、既成の視点にとらわれていた人間の思考をも解放せずにはおかない。

また、ベンヤミンは「破壊的性格は、自分が何よりも歴史的な人間だという意識を持っている。その根本衝動は、ものごとの進行に対するやみがたい不信であり、つねに「何もかもだめになるかもしれない」と思って焦らない。破壊的性格とはしたがって誠実ということである。」とも書いている。だが、破壊的性格を人間だけに限定する必要はあるまい。人間以外にもこのような性格を持った恐竜が存在する。ゴジラは、「ものごとの進行に対するやみがたい不信」をもっている恐竜である。ゴジラには、欲望というものが感じられない。だからゴジラには信用がおける。

ベンヤミンは、このエッセイのほぼ最後で「破壊的性格は持続を認めない。だからこそいたるところに道が見える。破壊的性格は、既成のものを瓦礫に変えてしまう。しかし、瓦礫そのもののためではない。その瓦礫のなかをぬう道のためなのである。」と書いている。

おそらくゴジラは、戦後日本最大の破壊的性格なのだ。

7. 『ゴジラ』(1954)の時間と堀田善衛の『時間』(1955)

ゴジラが、東京にはじめて現れ、破壊の限りを尽くしていた時、放送局の屋上でアナウンサーが悲壮な声で実況中継をしていた。その実況は以下のようなものであった。

信じられません、全く信じられません。その信じられない事件がいま我々の眼前において展開されているのであります。いまやゴジラの通過した跡は、炎の海と化し、見渡せば銀座尾張町より、新橋、田町、芝、芝浦方面は全く火の海です。唯今ゴジラは移動を開始いたしました。どうやらスキヤ橋方面に向かう模様であります。テレビをご覧の皆様、これは劇でも映画でもありません。現実の奇跡、世紀の怪事件です。我々の世界は、一瞬のうちに二百万年前の世界に引き戻されたのでありましょうか。

ゴジラは、実際には二百万年よりもっと古い時代の古生物、恐竜だが、ここにおいて近代化を志向する人間の時間と太古の恐竜の時間が、交錯している様子が、テレビによって実況中継されていたのだ。この近代化を志向する人間の時間と太古の恐竜の時間の交錯が描き出されていることこそ『ゴジラ』(1954)が、古典的名作たりえている一つの理由であろう。

一方、『方上記私記』(1988)を書いた作家、堀田善衛は、1955年に『時間』という作品を世に問うた作家でもあった。ゴジラが、日本社会に現れた翌年に発表されたこの『時間』という作品は、主人公、陳英諦という中国人の目を通して1937年12月の南京における天皇の軍隊の実態(殺戮)を描き出そうとした作品である。堀田善衛は、頭脳と目を日本人から中国人に入れ替えて文学作品を書くという離れ業をやっていたのだ。

だが、この高度経済成長の始まりの時期に発表されたこの作品は、稀有の試みであったにもかかわらず、過去の戦争の忌まわしい記憶を忘却したい日本社会においては「スルー」され、あまり話題にはならなかった。

しかし、堀田善衛は、次のような重要な文章を『時間』(1955)に書いている。

人間の時間、歴史の時間が濃度を増し、流れを速めて、他の国の異質な時間が侵入衝突してきて、瞬時に愛する者たちとの永訣を強いる。『時間』(岩波書店,2015)

この言葉に関して作家の辺見庸は、『完全版1★9★3★7(上)』(角川文庫、2016)で「ここにおいて作家は時間というものが文化と同じく、所によりその性質を異にし、他の国の異質な時間の暴力的な侵入により、いかに人々の生活が破壊されるかについて侵入された側の時間に立ってみてかたっている。」(118頁)と述べている。辺見は、この作品を1970年代の共同通信北京特派員時代に周囲から隠れるようにして読んでいたという。ここで辺見が言う「他の国の異質な時間の暴力的な侵入」を行ったのは、大日本帝国の側であり、侵入された側とは、中華民国の側である。

原武史によるならば、天皇による時間支配は、1937年の日中戦争以降、ほとんど年中行事化した

という。同年には西部標準時が廃止され、植民地および「満州国」の時間が統一され、国民精神総動員運動が、近衛内閣で行われることになった。この運動では時間厳守が強調され、紀元節(2月11日)天長節(4月29日)明治節(11月3日)など国民奉祝の時間が設けられていたという。大日本帝国の支配的な時間とはこうした時間のことをいう。この大日本帝国の時間が、中華民国の時間に侵入していたというわけだ。

ここにおいて私は、日本における市民科学者の課題とは、太古の恐竜であるゴジラの時間によって天皇による支配的な時間を相対化してみることでありたい。

おわりに

藤田直哉は『シン・ゴジラ論』(作品社,2017)において「ゴジラは天皇とは異なる神の在り方を示す。ゴジラとは、僕たちに常に科学と自然災害の「解決不可能性」を突きつけ続け、それでも努力を促す。諦めを許さないという点において、倫理的な基礎となる。そういう意味での「宗教」のような機能を帯びた存在である。それを「神」と呼んでいいだろう。ゴジラという虚構の「神」を戦後日本社会は、必要とし、そして生み出した。」(193頁)と述べている。ゴジラの英語表記のGodzillaは、後でdの文字が付け加えられたのだというが、これは決して偶然ではないだろう。ゴジラは、天皇とは異なる神の在り方を示すために我々の前に現れた。しかし、依然として日本という国は、天皇が時間を支配する国なのだ。「令和フィーバー」なるものは、その時間支配を補完するものでしかない。

自然と時間の怪獣であるゴジラは、天皇による時間支配の在り方(一世一元制)をも破壊する可能性を秘めた存在である。「破壊せよゴジラ」という声は、依然としてわれわれの声なのである。

市民科学研究所の活動は皆様からのご支援で成り立っています。『市民研通信』の記事論文の執筆や発行も同様です。もしこの記事や論文に興味深いと感じていただければ、ぜひ以下のサイトからワンコイン(100円)でのカンパをお願いします。小さな力が集まって世の中を変えていく確かな力となる— そんな営みの一歩だと思っていただければありがたいです。

[ワンコインカンパ](#) ← [ここをクリック](#) (市民研の paypal 支払いサイトに繋がります)

